みなとMOTOMACHIケンチクさんぽ vol.11

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部
兵庫地域会　地域まちづくり委員会

モトコーを歩く

神戸のまちは東西に細長くのびる商店街や町名が多くある。海から山までの間には何層もの東西レイヤーが重なり、レイヤーごとに色目が違う。そこに、山から海にかけての川や、川だった筋が東西レイヤーを南北に貫いている。南北の高低差と、東西には筋ごとに緩やかな蒲鉾状の地形が連続し、どこを切っても、どこを歩いても、表情や味わいがとても豊かだ。その中でも色濃い通りが通称「モトコー」元町高架通商店街である。東西のレイヤーの中で、ほろ苦くもっとも濃い、そんなイメージの場所だ。その場所が今大きく変わろうとしているということで、久しぶりにモトコーを歩いてみた。JR元町駅からJR神戸駅までの線路の下の約1kmの商店街。高架下の南側と北側に連続する商店が立ち並び、その間を東西に商店街がある。商店街はヒューマンスケールで人がすれ違うには肩が触れ合いそうな幅で、薄暗い。　所々、人の肩幅ほどの幅で南北に抜けている隙間があり、長い商店街の換気や光を取り入れている。JR元町駅から西に向かって進む。1番街の先頭は、淡水軒という中華料理屋さん。そこから入ると商店街は緩やかにカーブしながら下っている。レンガタイルと左右の商店は、10年前には、古着屋、レコード屋などがあったが、先日訪れたときには、たくさんの商店のシャッターがおり、シャッターには閉店の文字や移転先が書かれていた。2番街の始まりはレンセイ製菓。どこか郷愁を感じる店。私の事務所が元町3丁目にあった頃、2番街までは雨の日や夏の暑い日に通り抜けた。そして、3番街。今は白く背の高い仮囲いで覆われていた。その中でいくつかの商店が営業されていたが、何か白い空間の中のお店は、懐かしい佇まいの中に新鮮さも感じた。その横にあ った南北を抜ける公園のような場所は、ぽっかりと開いていてなんとなく清々しさがあった。そして次に黒い物体が新しく立てられていた。これは問題な塊だと感じた。ハリボテのレンガ調吹付けタイル、人を寄せ付けない硬さと嫌悪感を感じた。4番街からは、シャッターが前よりも増えていたが、私の知っているモトコーだった。そして、4番街からは看板に独自のネーミングが現る。4番街は花隈南商店街。また、前から気になっていたのは、4番街あたりから、通りの北側の建物と商店街の間に陳列棚のようなものが出てくること。商店街に対しては、その陳列棚が面していて、北側の商店は、北側の道路に対して開いた店構えになっていることだ。私がここを歩くときいつも、この陳列棚と南側の商店のシャッターが全部開いていて、肩をぶつけながら人が行き交う風景を想像する。どんな風に賑やかに人が行き交っていたんだろうか、お店の人がきっとこの隙間に体を寄せながら、お客と話をしていたんだろうか、と。そして、今、このシャッターの向こうには一体どんなものが収納されているんだろうか?と思いを馳せる。5番街のモトコーファイブは、ある時から商店街の天井が捲られ、高架橋のコンクリートの天井が見え隠れする。商店街の天井がなくなると一気に、別空間になる。日常から非日常に。隙間から見える2階がレトロだったりするとつい、そこで想像の物語が始まる。6番街のモトコータウン6もすっかりシャッターだらけだが音楽が流れ、そのスピーカーがみてきた風景を想像する。私はすっかり、モトコーが賑やかな時期を想像してきてしまったが、果たして、本当にそんな時代があったのかもわからない。東西に伸びる商店街の南側の商店が、どうして南の道路に対して開かないのか、についても前から気になっていたことだ。長い長い商店街は、小さな点の集まりで、そのそれぞれが魅力的で個性的だから面白い。シャッターとなった場所からも感じ取れる面影や気配がタイムスリップして、知らないはずの過去を想像させる。この神戸の肝のような場所が、リノベーションされ、神戸の新たな魅力を発信できる場所となるには、何かもっと仕掛けや巻き込みが必要なのではないかと思った。

モトコー１東出入口

所々南北に抜ける人の肩幅ほどの隙間

商店街（西向き）

モトコー６西出入口

これからのモトコー

すでにJRの橋脚の耐震改修でたくさんのエリアが解体され、今まで利用者の手で小さく改修し続けられた足元の小屋たちの循環が終わりをむかえる。動物的というか、自然発生的というか、そんな営みがなくなることにさみしさを感じるのは、モトコー自体で感じるもの以外に、動物的人間感のようなものが消えていく感じがするからだ。人間の性能が衰えるというか、そんな感覚にも思える。そのうち手の指がなくなるんじゃないかとか、野生的な感覚が薄れ、違うものが発達していくのだろうと感じる。でも、それは悪いことではないのかもしれない。全ての生き物が、常に進化という、変化し続けているのだから、きっとそうなんだろう。お年寄りにできて若者にはできないことがあり、お年寄りには思いもつかなくて、若者にできる発想がいつの時代にもあるから、ここモトコーでも同じことが起きているのかもしれない。変化を肯定的に考えて、ここからまた100年のモトコーの姿をつくってほしい。もっと言うと、1時代で、売り手側だけの都合でできた箱では、もはやモトコーの魅力を発揮できない。ぜひ、町ぐるみで、たくさんの人を巻き込んだ開発を進めてほしい。

阿曽 芙実（あそ ふみ）
阿曽芙実建築設計事務所　代表
／一級建築士
／武庫川女子大学　非常勤講師
／摂南大学　非常勤講師